

平成26年1月5日発行(毎月5日1回発行)
第54巻1月号(通巻54号)

風土



1

喫茶去
神蔵器

茶の花のふくみ笑ひに高台寺

白鳥待つ瓢湖の水を高ぶらせ

桂郎の「剃刀日記」終咲く

マリアより釈迦に近づく龍の玉

かしこみて天智天皇と芋の露

湯豆腐やのこる命の玉のごと
十二月何をなさむと生れけむ
たくわんのおもしろも冬至十日前
忘年会一つのこせりふるさとに
つつがなき「田舎教師」や帰り花
立冬や家の奥より声のして
扁額に「喫茶去」とあり石露の咲く



竹間集

同人作品



稲架襖

小林輝子

風の道 獣道とも 夕花野
立入りを禁ずと 徑に鳥頭
靄込めの日をひきずれる 穴まどひ
娶唄など聞えさう 稲架襖
豆叩く五体まんべんなく動き
留まれば厚物咲きの白翳る
湖を越し秋峰の影 秋峰へ

秋惜しむ

小野寺節子

秋めける日射しの移る古畳
追憶をひもどく目路に曼珠沙華
コスモスの花の命を風は知る
花蕎麦の畑思ひ出しそばする
目つむりて日本の秋探しゐる
今晚炊くこの新米は南部産
まなうらに綴る原稿秋惜しむ

虫時雨

田村すゝむ

虫時雨 残る命を大切に
醉芙蓉うすくれなゐの昼下り
蔓のある限り花野の道をゆく
紅葉の山河の旅信濡れて着く
寄せ返す波美しや浦の秋
嘘少し日記に書いて秋の暮
さつきから胸の高さに秋の蝶

雁渡る 瀬戸 悠

稲架掛けや有線はいま「天城越え」
飯盒に炊いて新米粒立てり
露けさの板戸に猫の出入口
赤子抱き門に出てをり十三夜
邯鄲や母の遺品の小巾刺し
木犀の闇を通りて外廁
米を研ぐ水の白さや雁渡る

秋 麗 塩田 博久

鱗雲来たのに乗つて気まま旅
行く秋や小さき旅にも荷の増えて
秋うらら水鳥は水脈さしかはし
露の宿十月桜に迎へられ
破蓮も沼の彩り朝日さす
爽秋や沼一周の七千歩
空ひろびろ桜紅葉の館林

新酒成る 田中 佐知子

朝顔の種採り合うて兄弟
明治蔵大正蔵や新酒成る
秋烏賊の干さるる影の整列す
桂郎忌白菊は露溜めみたり
桂郎忌ぐい呑の水盛り上がり
桂郎碑冬の蛙の鳴き出だす
句碑光る時雨のあとの瑞光寺

初しぐれ 工藤ミネ子

秋華展水も立華の花となし
度忘れや満天星もみぢ極まりぬ
村寂ぶの屋敷跡地はみな花野
とんばうの張りつく石となりけり
鳥のごと山を越しゆく落葉かな
村跡や石にも天地初しぐれ
村はづれ目隠しの如墓囲ふ

東欧紀行

門伝史会

『アルプスの瞳』のブレッド湖

秋気澄むチャペルの島へ手漕ぎ舟

ブレッド城内ワイナリーにて

大樽より新酒を詰めてサイン入れ

プリトヴィッツェ湖畔国立公園 三句

先を行く夫をへだてて水澄めり

秋闌ける道の行き尽き滝けぶる

山紅葉崖を斜めに滝落ちる

ヨーロッパ最大のポストイナ鍾乳洞

トロツコ列車洞の果てまで冷まじき

スプリット 三句

青空市場午後はカフェに秋の蝶

アドリア海の塩振る鱈と手長えび

旅に暮れ一会の人と秋惜しむ

東西に城門を置き鳥渡る

帰国して南ウイング冬めけり

山河集

同人作品



神蔵
器選

蜻蛉の迷ひを捨てし高みかな

近藤幸三郎

誕生と葬送の間に天の川
満願の鐘ひとつ撞き冬に入る
秋扇の一つ残りし懺悔室
木枯の残して行きし山の音

鏝阿寺の門前に買ふ石榴かな

雨宮桂子

鏝阿寺の歴代系図小鳥来る
上野をとんで下野芋嵐
天高し足利學校入学証
木の实降る日曜論語素読中

波立つは白刃のごと月下の航

十井三乙

津軽焼に津軽の酒と衣被
ふるさとは山国雪の来るころか

物忘れたがひにゆるし温め酒

故豊山千蔭氏の句碑除幕式に

秋爽や句碑建立の祝詞言

秋日傘太陽軽くなりけり

高村全子

木に倚れば木の声水に秋の声
澱むもの流れゆくもの秋の声
黙といふやすらぎに在り白障子
日は山へ山へと追はれ木守柿

秋風や師は西行てふ部屋にをり

杉本葉子

枯蓮となりて月光欲しいまま

茂林寺

句を作る狸もありて寺の秋

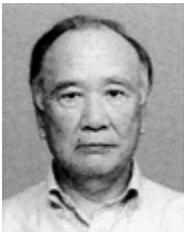
竜神の妻に髭あり沼の秋

風土賞作品

山暮らし

生田 作

末 枯るる 十石樽を地に据ゑて
冬霧に湿る野良衣のまま通す
文法を妻に問はるる冬菜畑
風落ちて木のぬくもりの枯木山
きさらぎや池一枚の水明かり
スコップの尖が石噛む雪の果
初蝶に地のぬくもりの届きけり
園児みなさくら散るとき口開けて



水撒いて畑に虹立つ聖五月
万緑に座して真白きにぎり飯
早苗饗のをとこ古事記を読めと言ふ
蕨野や因幡の人の遠会積
書割に熟るるゴツホの麦畑
梅雨明けの雲を抜けたる吉井川
国道に猪出るはなし半夏生
鯉跳ねて水面の厚き大暑かな
穂孕みの田の面ゆらりと晩夏光
淵抜けて秋めく水となりにけり
かなかなや曜日うしなふ山暮らし
すすき野に風届くまで見てをりぬ

風土賞作品

けふのほかなき

生田恵美子

白萩の一叢私設美術館
秋燕の細身一途にひるがへる
追ひかけてこぼれし木の実拾ひけり
蓮の実の小粒に飛んで尼の寺
大枯の中へ火襷抱へ出す
冬木立鞆に深く電話鳴り
投函ののちの四五日寒戻る
まんさくや出入り一つの村の口



バレンタインデー柳通りに人の混み
蟻出づる地上に慶事あるごとく
春泥や猫の差し足宙におき
文机の今も窓際雀の子
弔ひの家動き出す朝桜
永き日の漏刻門を潜りけり
たかんなの一夜に現るる井戸の端
けふのほかなき牡丹の色に佇つ
えごの花写真嫌ひの一人ゐて
白猫の朝の貴婦人百日紅
緑陰にためらひ押して人と会ふ
一条のどこにも触れず滝落つる

新人賞作品

出羽訛

石井美智子

愚直なる父の野良着や稲の花
田水沸く無口は父に倣ひたる
大杉の社をぐるり大暑かな
秋天や鈴鳴らしつつ森に入る
S L の記念運行秋惜しむ
男鹿岬鬼が連れ来る秋時雨
出羽富士の一句を添へて賀状書く
北国の農夫眠らせ大地凍つ



干し菜茹でいく度も水を替へにけり
地吹雪の中より忽とこまち号
寒夕焼見つつ都会の人となる
かまくらの中より出羽の訛かな
旧正や男綱女綱の藁こぼれ
峡の田の斑に日差しありにけり
摘草や童に返る声あげて
早蕨や野に人の声鳥の声
無医村に医者来る話山笑ふ
亀鳴くや親には敵はぬことばかり
家計簿に肥料千円別れ霜
寺町の辻を左に春日傘

◇特別作品◇(抄)

蕪干す

間島あきら

高雄路の冬霧描く山の丈
日を置きで北山時雨となりにけり
山里に藁塚小さし百枚田
また会へる西京筋の実南天
足取らる高山寺口花八つ手
わたむしや標高百の念仏寺
石仏のあはひ降り継ぐ冬紅葉
縁小春「つもりちがひ」の十ヶ条
照り降りの忙しき嵯峨野蕪干す
仰ぎけり小倉の峰の冬の虹

風土独語／神蔵器



実柘榴を数へて七個彦根城 生出 作

顔ぶれの揃ひて十月桜咲く

柿沼 盟子

今年の鍛錬会は群馬県館林、つつじが岡パークインで開かれた。参加者は三十五名で、年毎に少なくなるが、先ずは大方の顔ぶれが揃ったことは何よりも心強く有難かった。

掲出句は別に説明は必要ないと思うが、「十月桜咲く」が動かない。

私事になるが、私をはじめて十月桜を知ったのは、もう二十年以上も前になる。みちのくの俳句大会の帰り、輝子さん、ミネ子さんと盛岡の原敬の菩提寺大慈寺を訪ねた。境内の左手が墓地になっており、その墓地の入口、数段の石段の前に一本の桜の木があり、白い小さな花をまばらに咲かせていた。

「あ、返り花だー！」
と、思わず声を上げた。すると、うしろから、

「それは返り花ではないのですよ、十月さくらと言っています。毎年、原敬の命日のころに、かならず花が咲くのです」と。

私はびびりして、後をふりかえみると、そこに初老の貴婦人の婆はなかった。

彦根城の天守は一重目の軒に八個の切妻破風を交錯させた、その外観は、天守のなかでもっとも技巧にかった天守といわれ国宝になっている。その天守閣の前の庭に大きな柘榴の木が一本ある。折から秋もたけなわ、大人の拳大に大きく実になった柘榴は、早いものは、ひとりでに裂けて、うす桃色の肉でつつまれた多数の種子をのぞかせている。

ところで、彦根城の天守は、慶長十一年（一六〇六）に井伊直継が現地に築いたとのことであるが、その時に新造されたものではなく、天正（一五七三〜九二）年間に築造された大津城天守を移築したものと『井伊年譜』は伝えている。もちろん移築に当っては、相当の改造は加えられたかも知れないが、外部三重、内部三階の小規模ながら、前に書いたとおり一重目の軒の四方に八個の切妻破風を軒に交錯させた見事さは類を見ない。

土地は東西を結ぶ最重要地区、風景は琵琶湖を眼前にする名勝、そして天守は国宝、その前の庭に、ただ一本のさくろの木を植えたのは誰か。

『季祖収の伝』に曰、元魏の安德王延宗、季祖収を納れて妃となす。後に帝、季宅に幸す。しかして、妃の母、石榴を帝の前にすすむ。人その意を知ることなし。祖収いわく、子孫多からんことを欲するなりと（北史）。

風土集



神蔵器選

田山花袋自居

木の実降る舟の形め外流し
嶺々はるか平野の芯の水の秋
顔ぶれの揃ひて十月桜咲く
四桁の番号札つく帰り花
水鳥の数多こ糸抱き蓮枯るる
本堂に雲中菩薩小鳥来る
木洩れ日の障子の内に花袋かな
茂林寺に一茶句碑かな秋惜しむ
後の月螺旋階段登り切り
身を反らし組体操の決まりけり
台風一過日暮れてゐたり彦根駅
埋木舎うもれぎのやてふ近江の萩の家
搦手の石垣に散る櫻かな
実石榴を数へて七個彦根城

東京

柿沼 盟子

さいたま

須藤美智子

津山

生田 作

ひややかや天守二階の武者溜り

彦根

石垣の石に番号鳥渡る
実石榴の爆ぜて近江の海ひらく

栗栗舎

津山

生田惠美子

捨扶持の三百俵や萩の庭
踏み入るや人恋ふ秋の蚊に就かれ
半部を上げて小暗き秋思の間
彩色の仏画の前や秋気澄む
一人坐しひとりよりそふ月の人
新松子いわきの海を思ふべう
四脚門くぐりて聞きぬ秋のこ糸
札所寺一目万本の萩を刈る
蔓引けば零余子の雨を打ちかぶる
老いらくはときに童心ねこじやらし

秋田

本間 羊山